



第 29 号

令和 2 年 11 月 16 日発行
会 員 募 集 中
年会費 3,000 円
10 月以降入会 1,500 円

歴研サロン会、継続して開催される 会員に発表の場を提供、毎回 30 ～ 60 名が参加

山田良三事務局長、兼サロン委員会委員長の尽力で、新型コロナウイルスの感染を予防しながら歴研サロン会が継続して開催されている。それぞれの会員がこれまで蓄積してきた研究テーマについて、発表の場を提供している。参加される会員も、毎回 30 ～ 60 名に及んでいる。毎回、ゆうあいセンターで、午後 1 時 30 分より開催されている。最近行われたサロン会の模様を以下に紹介します。

7 月 9 日 (木)

「世界が注目する縄文文化とその時代」

猪風来美術館（新見市法曾陶芸館） 館長 猪風来氏（本名 村上氏）

猪風来氏による「世界が注目する縄文文化とその時代」と題する講演が行われた。約 60 名の参加があった。武蔵野美術大学油絵学科を卒業して以来、縄文土器のかけらに魅せられ、縄文時代の虜になり、あちこちの縄文式土器のかけらをもとに復元し、それを映像で示された。

北海道に渡り、竪穴式住居を建てて、アトリエとし、以後約 20 年間、縄文時代同様の自給自足の生活を身をもって体験し、縄文式土器を創作してきた。そして、2013 年以来、新見市法曾にある猪風来美術館で活動を続けていると話された。

併せて地元につながる古陶、法曾焼きを 150 年振りに復活させた。



猪風来氏と縄文式土器

歴・研・展・望

柿喰えば鐘が鳴るなり・・・の句を思い出す季節となりました。わが家の柿（富有柿）も鈴生りに実を付けました。（一昨年、枝を切り隙間を作った効果があったようです。）と、一人で合点しています。

鐘樓の建物が目印となっている高梁御前神社（おんざきじんじや）の時報を告げる鐘の音は独特の音

色を響かせています。しかし、実は録音テープです。高さ 4 メートルの鐘樓の上に、慶安 4 年（1651 年）備中松山藩主、水谷勝隆が寄進したものでした。

第二次世界大戦中は供出されていました。

現下の、コロナウイルス禍のもと、各人が注意を怠らず、元気で再会できることを願っています。

（会長 石井 保）

岡山県でも瀬戸内沿岸から、岡山大学の敷地内をはじめ、多くの場所で縄文式土器が発掘されている。又、広島県では山奥の帝釈峡からも発掘されているとのこと。

縄文時代は今から 5 千年から 1 万 5 千年前の時代であり、女性が優位に立つ社会で、新しい命を産む女性が大事にされたと。生活様式は狩猟生活で、動物の肉、野に生える草、野菜を食べていたと。人間には 37℃ の熱量しかなく、土器を焼くにも火が必要である。火を熾^{おこ}していたものと考えられる。

学校での歴史の時間に、弥生時代が文明の夜明けと習ったが、その前の縄文時代は闇の時代ではなく、人間の生存の原点の時代であり、それを表すいろいろの土器、土偶が作られたという。今、縄文時代に世界が注目するのは、今の時代、科学や技術の力でいろいろのものが作られ、溢れていて、原点を見失ってきているからとのことでした。

※猪風来美術館（新見市法曾 609 電話：0867-75-2444）

9 月 10 日 (木)

「熊山遺跡をめぐる人々」

講師：岡野 進氏（顧問、熊山遺跡研究会副会長）



岡野 進氏

長年、熊山遺跡調査・研究会々長を務めて来られた岡野進氏が「熊山遺跡をめぐる人々」と題して講演された。28 名が参加された。「熊山遺跡」（熊山（508 m）の山頂にある石積みの建造物。奈良時代前期の仏教遺跡とされる。昭和 31 年に国の史跡に指定された。）の世界遺産化を目指して、長年の研究成果を手作りの資料に纏め、報告された。

本当に熊山を大切に思い、愛してこられたことがよくわかった。また、熊山が東備前で重要な場所であったことも改めて理解できた。

10 月 14 日 (水)

「秦の古墳と秦氏」

講師：板野忠司氏（会員、秦歴史遺産協議会々長）



板野忠司氏

板野氏は地元、総社市秦地区に遺る古墳や、遺跡を中心に古代吉備国の位置付けとその現状について話された。約 30 名の参加があった。秦地区には大小併せて約 70 基の古墳が集中している。とりわけ前方後方墳の一丁ぐろ 1 号墳（4 世紀前半、全長 70 m）と茶臼嶽古墳（3 世紀末、全長 58.3 m）、また前方後円墳の大ぐろ古墳（4 世紀、全長 63 m）は大型古墳で、調査が待たれる。

いずれにしても秦地域を含む岡山県内南部地域には畿内に匹敵する大勢力があったと考えられる。「これは、5 世紀に築造とされる造山古墳、作山古墳より古く、楯築遺跡・宮山墳丘墓に次ぐ卑弥呼直後の 3～4 世紀の古代吉備国の古墳群を形成するもので、三角縁四神獣鏡も出土しており、高梁川西岸の吉備地方秦にも古くから相当の勢力があったことが推測される。

現状では、太古の 10 代崇神天皇・11 代垂仁天皇と四道將軍五十狹斧彥命（吉備津彥命）の話や温羅伝説をモチーフにした桃太郎伝説を披歴しながら 7～8 世紀の 鬼ノ城や国分寺が古代吉備国の象徴的存在とされているが、神話や伝説ではなく、実在する 3～4 世紀の秦古墳群の発掘調査や、中四国で最も古いとされている廃寺・製鉄の女神を祀る姫社神社等と渡来人秦氏の関係究明など、科学的、考古学的検証が古代吉備国の空白を埋めるに不可欠である。」と話された。

「戦国備前の攻防と山城」

講師：伊達教夫氏（会員、中世山城研究家）



伊達教夫氏

伊達氏は備前、備中、美作の中世の年表と山城の位置図、著名な山城の平面図を提供し、中世、戦国時代の始まりから現在の岡山県内の権力の変遷を話された。松田氏、浦上氏、宇喜多氏、毛利氏等の権力闘争、変遷を経て、そして、最後は秀吉による備中高松城の水攻めにより攻防は終わったと話された。

その後、板野氏を囲んで古代史、伊達氏を囲んで中世史、そして近現代史の3つのグループに別れて懇親、討論を行った。それぞれの時代の問題点、疑問点、歴史的な意味等に関し、盛り上がった意見交換会になった。

10 月 18 日 (日)

「イワクラ（磐座）」について

講師：高木寛治氏（会員、総社市在住、医師）



高木寛治氏

小児科と精神科の医師である高木寛治氏が主に県内の磐座（イワクラ）について話された。現在 77 歳であるご自身が磐座について興味を持たれたのは 50 歳を過ぎてからとのこと。

イワクラ（磐座）とはイワクラ学会の定義によると、「イワクラとは縄文時代から古墳時代にかけて形成された巨石遺構をさす。その時代時代の人間が何らかの意図をもって、その目的や役割に合致するよう磐を人工的に組み上げ、あるいは自然の磐そのものを活用したもの。その中でも特に神社のご神体となっているものを『磐座』^{いわさか}と呼んでいる。」と。

かつては身近に石が多く使われてきたが、最近はコンクリートやアスファルトが多くなったと嘆く。ご自身の庭には石材をふんだんに使い、磐座を配置しているとのこと。もともと地球は石でできている。前に立つと思わず頭を垂れたいくなる磐座があるという。また、石に関する詩、歌、句も紹介された。詩人の坂倉真民や中島敦等の詩や歌、そして知人の二宗吟平氏の句「丸うなれ まあるうなれと 石の声」を紹介された。

磐座は三つの川が合流するところ、大きな河川が直角に曲がる場所にできやすいとのこと。それに該当する岡山県内に存在する磐座を地図で示された。本人は本を書くのが趣味で、これまでに「石と在る」（還暦）、「石に学ぶ」（古希）「石で変わる」（平成 28 年）を自費出版されたとのこと。

10 周年記念誌 来年（令和 3 年）2 月頃 発行予定

岡山歴史研究会の発足以来の活動内容を記載した 10 周年記念誌「二千年の歴史・岡山の輝き」と題する記念誌が来年 2 月頃、発行の予定になりました。A4 版、表紙はカラー、全体はモノクロで、約 200 ページ、700 部発行する予定です。印刷費並びに配送費を加えると 80 万円以上かかります。

会員への頒布については郵送するか、記念事業の時に配布するか今後検討します。

また、会員には名刺広告を 1 人当たり 5,000 円で募ります。予算不足の折、できるだけ多くの会員の皆さんにお力添えをお願いします。加えて、企業や県内の多くの歴史団体にも呼び掛けて広告を出していただくよう募ります。

国会図書館や県内の図書館や公民館、全国の関連のある歴史研究団体へは無償で配布する予定です。

広告を希望される方は事務局（山田良三氏）または編集長（井上氏 090-5964-7312）までご連絡ください。

吉備真備と片仮名

能勢 初枝（旧会員、神戸市在住）

吉備真備は、吉備の国の人である。吉備地方の豪族の出だが、いわゆる貴族階級ではない。

しかし、最後は右大臣にまでなった。こうした身分の出で、右大臣にまでなったのは吉備真備と菅原道真だけである。道真は最期が悲劇的だが、真備の場合は、七十八歳まで大臣の職を辞することを許されなかったほど朝廷に重用された人物である。多くの功績を揚げながら、謙虚な人だったのか、『続日本紀』にその生涯の功績・経歴が詳しく記述されているが、それを自ら誇った様子はない。特に古くから、片仮名の創設者とされながらも、いまだにそれが定説にならないのも、彼の自ら喧伝しない性格の所為だろうか。

吉備真備に関する『続日本紀』の記事(1)

宝亀 8 年十二月二日、前右大臣・正二位・勲二等の吉備朝臣真備が薨じた。

真備は右衛士少尉の下道朝臣罔勝の子である。霊亀二年（716）、二十二歳の時、遣唐使に従って、入唐し、留学生として学業を受けた。経書（儒教の古典）と史書を研究し、またおおくの学芸に広くおよんだ。わが本朝の学生で、唐で名をあげた者は、吉備大臣と朝衡（阿倍仲麻呂）の二人だけである。

■吉備真備の出身と唐への留学

「続日本紀」の最初に、前の右大臣吉備真備公は、宝亀八年（775年）十二月二日に亡くなられたと書いている。

彼の父親は下道朝臣罔勝と言う。

^{しもつみち}下道とは、大和盆地を東西に走る古道のことともいうが、ここでは下道郡すなわち吉備郡のことで、岡山県の高梁川西岸地区（現在の総社市、倉敷市）の出身者で、父親は^{えじ}衛士の少将だという。衛士とは、一年交替で律令制下の諸国から徴用されて、皇居の門を守る兵士であるが、朝



吉備真備公

臣とあるので吉備の豪族出身だろう。

参考 御垣守衛士の焚く火の夜は燃えて昼は消えつつものをこそ思へ 大中臣能宣朝臣
百人一首（宮中の御門を守る衛士（兵士）が焚くかがり火のように、夜は恋の思いに胸を焦がし、昼は物思いに沈むのです）

その子の真備の幼年期については、記録がないが、平城京遷都の和銅三年（710年）には、父親に付いて新都平城京にいたことが想像出来る。

おそらく優秀な子なので、大学寮で学び、二十二歳になった霊亀二年（716年）元正天皇の時代に、留学生に選ばれて唐に渡った。留学した年については、養老元年（717）説が有力で、阿部仲麻呂、僧玄昉などと、第八次遣唐使船で渡唐した。ちなみに帰国は天平七年（735）で、足かけ十八年間、唐に滞在したといわれている。

そのときの多くの日本人留学生の中では、吉備真備と阿倍仲麻呂の二人が有名であった。

吉備真備に関する『続日本紀』の記事(2)

天平七年に帰朝して、正六位下を授けられ、大学助を拜命した。高野天皇（孝謙天皇、この時は阿倍内親王）は真備を師として、『礼記』と『漢書』の講義を受けた。

恩寵がたいへん厚く、「吉備朝臣真備」の姓を賜り、昇進を重ねて、七年のうちに従四位上・右京大夫兼右衛士督に至った。

■帰国して阿倍内親王に漢書を教える

養老元年（717年）に留学生として、唐へ渡った吉備真備は、天平七年（735年）に帰国。足掛け十八年を唐で過ごして三十歳になっていた。このとき、一緒に行った安倍仲麻呂は、唐で役人として出世していて皇帝が帰国を許可しなかった。

真備は帰国後、正六位下という貴族の位としては低い位を授けられ大学の助教授になった。また、吉備真備の姓を賜った。そして阿倍内親王に、『礼記』や『漢書』を教授することになった。

阿倍内親王は聖武天皇の娘で、後に孝謙天皇になり重祚して称徳天皇になった初の女性皇太子であるが、この功績が評価されたのか、七年後には従四位上・右京大夫兼右衛士督と、早い出世になった。

■送り仮名を考案する

ところで、『礼記』も『漢書』も、中国の書物で、当然漢字のみで書かれている。中国語には、日本語の助詞にあたる「テ・ニ・ヲ・ハ」即ち「送り仮名」がない。

また、「デス、マス、タ」など文の終りを表す助動詞を補わなければ、日本人には理解し難い。また語順・文法も違うので、前に戻って読む「返り点」も必要だ。

吉備真備は高野皇太子の為に、まず中国の書籍を理解しやすくするため、送り仮名を考案した。そこで「万葉仮名」では、本文と紛らわしいので、漢字の一部をとって、記号的につかい始めた。これが片仮名の初めだと思われる。

例えば、論語の「學而時習之 不亦説乎 有朋自遠方来 不亦楽乎 人不知而不愠 不亦君子乎」今では、よく知られている詩句なので、返り点も送り仮名なくても、漢文を学んだことのある者なら、理解することはできるが、初めてでは読めないし、意味も分らないだろう。しかし、「送り仮名」や「返り点」があれば読める。（ただし、ここでは横書きなので、返り点は省略する）

學而時習之、不亦説乎 有朋自遠方来
不亦楽乎 人不知而不愠 不亦君子乎

（学びて時に之を習う、また説しからずや 朋あり遠方より来たる また楽しからずや 人知らずして愠らず また君子ならずや）

「万葉がな」では「安」が「あ」と読まれ、これから「平仮名」の「あ」になった。真備は、送り仮名として、「阿」の偏の「丿」を取り出し「ア」にした。

■真備、カタカナの五十音図を考案か

『続日本紀』は、真備の片仮名創設のことは直接には触れられてないが、カタカナに関しては、耕雲散人明魏という人が著わした「倭片仮名反切義解」が、最も古い記録であり、そこ

では吉備大臣がカタカナを考案したと書かれている。明魏は、真備より六百年後の人で、俗名花山院長親ながちかと言ひ、祖父は南朝の忠臣大納言師賢すけで、父は権中納言家賢という。彼自身は、源氏物語の解釈書など多くを著している学者で、後に僧侶になっている。

「倭片仮名反切義解」原文

(上略) 天平勝宝年中に到うしやうしょうて右丞相吉備真備公、我邦に通用する所の仮字四十五字を取りて、偏旁点画を省きて片仮名を作る。抑々四十字音の響及び阿伊字江乎の五字、これ乃ち天地自然の倭語なり。是の故にたて縦に五字を列ね、横に十字を列ね、同音五字を加入して五十字と為す。且つ又、横の十字は唇舌牙齒に隋きゅうひ、宮商角徵羽根宮変徴の七声を用ふるか。蓋し世俗之を伝へて吉備大臣倭片仮名反切と云不(以下略、原漢文)※宮商角徵羽根宮変徴は音韻律と楽器をあらわす

真備が考案したといわれる片仮名五十音図

【参考「吉備真備」吉備町教育委員会

平成七年三月発行による】

和	良	也	末	半	奈	多	差	加	阿
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
井	利	伊	三	比	仁	千	之	幾	伊
井	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
宇	流	遊	牟	不	奴	爪	須	久	宇
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
慧	礼	江	女	父	子	天	世	氣	江
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
乎	呂	興	毛	保	乃	止	曾	已	於
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

天平七年、唐から帰国した真備は、袁晋卿えんしんけいという中国の音博士を伴って帰っていた。

真備は、必要に駆られて考案した片仮名を元にして、袁晋卿の協力で、カタカナの五十音図をつくった。中国の文字が用いられているせいか、ケ、サ、ハ、エ、ユなど、日本の字とは、微妙にちがう。やむなく作字した。

袁晋卿は、大学音博士の称号を授けられ、のちに大学頭になった。

続いて『続日本紀』で、真備の業績と波乱にとんだ生涯を簡単にみておく

『続日本紀』の吉備真備関係記事(3)

天平十一年、式部少輔・従五位下の藤原広嗣は、玄昉法師と対立し、地方官に転じて太宰少貳に任ぜられた。転任するとすぐ、玄昉や真備を討つために、兵を挙げて反乱を起こした。広嗣の兵は破れ、誅されたが、彼のよこしまな魂はまだおさまらず、天平勝宝二年、真備を筑前守に左遷させ、さらに急に肥前守に転任させた。

真備は同四年、遣唐使となり、帰国して正四位下を授けられ、太宰大貳を任ぜられた。建議して初めて筑前国に怡土城を造り、天平宝字七年、工事がほぼ終わり、造東大寺長官に遷った。八年に藤原仲麻呂が謀反を起こした時、吉備大臣は、彼等がきっと逃走すると考えて、兵を分けてこれを遮った。この指揮や編隊ぶりは非常に優れた軍略で、賊軍(藤原仲麻呂)は遂に策謀に陥り、短期間ですべて平らげられた。この功績で従三位・勲二等を授けられ、参議・中衛大將に任ぜられ、さらに右大臣に任ぜられ従二位を授けられた。

これより以前、大学の釋奠しゃくてん(孔子を祭る儀式)は、まだ整っていなかったが、吉備大臣は礼典

に従って考察し、祭器を初めて整え、儀礼の様式も見られるものになった。また、大蔵省の双倉が焼けたときも、大臣が一人で新たに設計した。これは今ものこっている。宝亀元年に書面で辞意を奏上したが、天皇は丁寧な詔勅を下して、許さなかった。ただ中衛大将の職を辞すことだけは許可した。同年二月に、再び書面をたてまつって辞職を請い願い、やっと許された。薨じた時、年は八十三歳であった。天皇は使者を遣わし、物を贈って弔った。

(注) 真備が遣唐使として、入唐したのは、二十三歳、没年は八十一歳とする説が有力。

■藤原広嗣の乱平定。藤原仲麻呂の台頭

真備が留学していた十八年の間に、国内では、藤原不比等の死(720年)、聖武天皇即位(724年)、長屋王滅亡(729年)、^{あすかひめ}安宿媛、光明皇后になる(729年)などの動きがあった。高野内親王は、光明皇后の娘である。不比等の死で、橘諸兄が権力を握る。僧玄昉は文武天皇の妃宮子夫人の病いの治療をおこなって、玄昉・真備が橘諸兄の信頼を得る。

藤原四兄弟の一人^{うまかい}宇合の子、藤原広嗣は武家の長男として、藤原氏の再興を目指す、その行動は急進的で橘諸兄や僧玄昉・真備などと対立する。また他の藤原氏からも孤立して太宰府に流される。彼は玄昉・真備を恨んで、彼等を追放するよう上申書を出す。認められず、兵を挙げるが、玄昉・真備に責められて滅亡する。

この乱の平定の功績で、真備は正五位になる。

また、皇太子就任の^{こせちのまい}五節舞の成功に寄与したとして、従四位下に昇進する。

しかし、光明皇后に取り入って、台頭して来

た藤原仲麻呂(恵美押勝)に疎まれて、筑前守、続いて肥後守に左遷される。僧玄昉は、筑紫観世音寺に左遷後殺害されたといわれる。

このころ真備の母が亡くなり、大和宇智郡大沢村に葬られる。彼女は^{やぎ}大和楊貴氏の出。

■吉備真備、二度目の遣唐使派遣

天平勝宝四年、真備は九州から呼び戻されて、第十次遣唐使船の副使として、二度目の渡唐を命じられた。長官の藤原清河が、まったく中国語が出来ないので、中国語の堪能な真備が呼びもどされた。今回は、何度も来日に失敗した鑑真和尚を日本に招くことが主な使命だったので、二年間で帰国する事になった。

遣唐使船は、四隻で出港するのが一般的。ところが阿倍仲麻呂の船は安南(ベトナム)に漂着、もう一人の副使小麻呂が無事鑑真を連れて帰国という。真備は牟婁崎に上陸。長官の清河は、行方不明だったが、かなり後に帰国したらしい。

■恵美押勝、弓削道鏡の野望を退け、七十八才まで右大臣の職を全うする

役目を果たした真備は従三位・勲二等を授けられ、参議・中衛大将に任ぜられた。しかし、藤原仲麻呂(恵美押勝)にうとまれて、太宰大貳として、またも太宰府に流される。真備の立派なところは、何度左遷されても、へこたれることはなく、現地に若者の学校を築いて、若者の教育を行ったり、防衛のための土堀をつくったりしたことだ。真備と同じく庶民から右大臣にまで出世した菅原道真是、太宰府に左遷されると、嘆き悲しんで亡くなった。

都では、恵美押勝が天皇の位を狙うなど横暴を極めていたので、真備に討伐の命が下り、真

備がこれを平定したので、勲二等正三位を授けられた。のち、従二位になり、右大臣になる。

彼の功績は、『続日本紀』にあるように、各種の典義礼の整備のほか、新しい暦を広め、麦の栽培を進めるなど、各分野で広く功績があった。

また和気清麿を支援して、弓削道鏡のあらたな野望を砕いた。

称徳天皇のとき大臣の辞任を希望したが、許されず、称徳天皇が崩御して、光仁天皇が即位したとき、宝亀二年（778）七十八歳で辞する事がゆるされた。

片仮名創設に関する諸説

江戸時代までは、カタカナ創設者は吉備真備だというのが一般的に信じられていたが、近年になって他の説が出て来たので紹介しておく。

- ◎ 国語学者の山田孝雄博士は名著「五十音図の歴史」で、カタカナの創設には、①神授説②悉曇^{しつたん}学者の作 ③吉備真備の三説がある事を紹介して、①と②については、資料もないので信憑性がないと否定している。真備説は、

^{こうりんさんじんみょうぎ}耕運散人明魏の^{わかたかなはんせつぎかい}「倭片仮名反切義解」の存在によって、片仮名を作ったのは真備ではないかとしながらも、五十音図は作ってないだろうと言っている。カタカナに関しては山田説をとる学者は多い。

- ◎ 国語辞典編纂の大槻文彦氏は②の説をとり、廣日本文典第十四節で、次のように説いている。

「片仮名五十音図ハ、吉備大臣ガ作ナリト言伝フ。然レドモ真言僧徒ガ天竺ノ悉曇章トイフモノニ^よ縊リテ邦人ニ固有スル音ノミヲ挙ゲテ作りシモノナリトイフ説信ズベキガ如シ。」と言い、別記に「悉曇章ハ大臣ノ時代ニハ未ダ我が国ニハ伝ハラズ、弘法大師入唐シテ、始メテ梵音ヲ学ビテヨリ伝ハリタリト言フ。然ルトキハ五十音図トイフモノハ密徒ノ作りシモノナルベシ。」（悉曇は梵語・サンスクリットの字母で、古代インドから中国を^{あつたね}通って日本に伝わった）

- ◎ ①の神が下したという説は、平田篤胤など国粹主義者が唱えているが、論理的には見るべきものはないらしい。

（本稿は、平成26年2月25日開催の第5回歴研サロン講演要旨を演者がまとめたものである。）

第1回 山城探訪会のご案内（当日が迫っています。お早めに）

北房・中津井 佐井田城址 探訪

日 時：令和2年11月18日（水曜） 定員 25 名、雨天中止

集 合：岡山駅西口（8：00）～倉敷駅北口（8：40）

探訪先：マイクロバスで探訪、佐井田城址、願成寺、大谷1号墳、金毘羅神社、旧菅野邸

中津井陣屋跡、（昼食）仏源寺、定古墳群

参加費：4000 円（昼食代込み）

参加申し込み先：伊達 教夫氏 携帯電話 090-8600-6950

郷土史と共に歩む

井上 秀男（会員）

福田史談会との出会い

私が郷土史に興味を持ったのは昭和 60 年（1985）頃と思う。今から 35 年も前になる。自宅から会社へ通勤している途中の倉敷市福田町広江に「ニューリンデン」という喫茶店があり、帰りに良くコーヒーを飲みに立ち寄っていた。ある時店長の高橋さんから、この店の 2 階の会議室で「福田史談会」という名称で郷土史の会を開催しているので良かったら入会されないかと誘われ、会長の高橋さんから会の説明を受けて入会したのが私の郷土史研究への入口であった。

福田史談会の活動は福田地区及び周辺の神社、寺院、城跡、石造物、伝説、人物等について史跡探訪と会員からの資料を集めて会報を発行し、会員に配布する。例会は 2 ヶ月に 1 回、研究発表、講演会を開催していた。私の入会した頃の会員は 30 名位でした。

平成 3 年頃からは福田史談会の講演会担当を任せられ、講演会の講師の先生の手配に直接会ってお願いしたり、電話で予約したこともあった。それと講演会当日に参加者が多数来て頂けたら良いのですが、参加者が少ない場合は講師の先生に対して申し訳ないので、前もって会員の方々には電話して人数の確認をしたりして大変に苦労した思い出がある。

講師の先生として平成 5 年 10 月「特殊器台」について高橋護先生に、平成 7 年 4 月「岡山の石造美術」で斉藤孝先生、「吉備津彦と造山古墳」で出宮徳尚先生、近世史で倉地克直先生、民俗学の佐藤米司先生等到大変にお世話になった。その他多くの郷土史研究家の先生に講師としてお願いしてきた。しかし私自身も講演して頂く先生のテーマについて先生方と会話ができる様にと、資料を集めたり、調べるため図書館に足を運んだ。そうすることで私自身勉強になった。そして講師の諸先生との面識ができたし、色々な事をご指導頂き、人と人との人脈を通じて歴史の輪が広がった。

その当時、講師としてお世話になった先生方も高年齢となられている。又、故人となられた先生もおられる。私が福田史談会に入会してからの会報を見ると、色々な人達との出会いがある。長年、岡山歴史研究会の会員であった樋口俊介氏（先日亡くなられた。）は、私が福田史談会への入会をすすめて会員になられた一人です。それ以来、歴史を通じての親友として、私も岡山歴史研究会の一員として親交が今日まで続きました。

福田史談会には 10 年間会員として活動していましたが、私自身の事情で退会しました。会長の高橋さんも高齢者となられている。福田地区、児島地区を自分の足とカメラを持って調査され、資料を福田史談会の会報に載せられ、自分の資料集の冊子も多く残されている郷土史家です。私を歴史の道に導いてくださった恩人でもあります。



井上秀男氏



故樋口俊介氏

吉備考古会について

岡山市に昭和 2 年（1927 年）、考古学及び郷土史の好きな有志の方々によって「吉備考古会」と称する研究会が創立されている。今から 93 年前である。最初は「考古談話」と称していたが昭和 3 年（1928）12 月に会則制定と共に「岡山考古会」と改名し、更に昭和 5 年（1930）4 月に「吉備考古会」と改称されている。

活動については例会、講演会、見学会等があり、会報の発行は年 4 回あった。編集所は御津郡（現在の岡山市）横井村大字横井上 776 番地 水原岩太郎宅になっている。吉備考古の会報を見てみると考古学に対する会員の熱心な意気込みが感じられる。県下で発見された土器、石器類が実物大の大きさと描かれている。又会員の方が県下の神社、寺院、城跡、石造物、宝篋印塔、仏像等を見学会で見て来た寄稿文が、会報の中に書かれている。今日のようなワープロでなくて鉄筆で書かれガリ版刷である。

吉備考古会が昭和 2 年（1927）に創立されて 10 年後の昭和 12 年（1937）2 月に、10 周年記念号として吉備考古 32 号を発行している。今から 83 年前である。その当時、会員の佐上静夫、伊藤忠志、佐藤美津夫氏が創立から 10 年の歩みを執筆されている。この年の 12 月は、日本軍が中国南京を占領して大虐殺事件があった年で、現在の様な平和でなかった世相の中で郷土の考古学や郷土史を広めるために努力された諸先生達のガリ版の文章を読んでいると、頭の下がる思いである。

それと、昭和 13 年（1938）2 月に発行された会報吉備考古 36 号に当時の会員名簿が記されている。名誉会長として京都帝国大学経済学部博士黒正巖、副会長玉井伊三郎、文学博士藤井駿、顧問 原澄治、文学博士鳥居龍蔵、永山卯三郎、文学博士喜田貞吉、医学博士清野謙次等の名前が記され、会員 95 名の名前が名簿として記してある。その中に私の父井上賀弥太の名前が載っている。会報の昭和 17 年 7 月、30 号に“周匝（スサイ）山方の見学”と題して現在の赤磐市周匝の寺院集力山吉祥院の鰐口（ワニグチ）の拝見や、吉井町小字清水という場所にある阿弥陀如来座像の拝見に、父が会員の人達を案内した見学会のことが書いてある。すなわち父が吉備考古会の会員であったために会報の原本を保管してくれていたの、現在私が保管しているのである。

吉備考古の会報が、29 号～36 号、48 号、49 号、50 号、54 号、55 号、計 13 冊がある。私が郷土史を始めて岡山県内の史跡、文献資料、郡、町、村を調べていると、著者として吉備考古の名簿に見られる名前が資料本の中に登場する。永山卯三郎、水原岩太郎、多和和彦、宗澤節雄、佐上静夫、時実黙水、大本琢寿、松岡繁雄、他にも知った郷土史家の諸先生もおられる。しかし現在、元気にされている人は少ないと思われる。すでに故人となられた方が多いと思います。岡山県内の歴史を調べる場合に吉備考古に執筆されている諸先生の資料を参考にさせて頂くことがあります。貴重な資料です。

倉敷中央図書館に吉備考古会の役員であった永山卯三郎氏が所有されていた郷土資料を市に寄贈され、



永山卯三郎氏が郷土資料を寄贈した倉敷市立中央図書館

永山玄石文庫と称される貴重な資料が保管されている。その中に吉備考古の創刊号からの発行された会報が保管されていたと思われる。その他の郷土史資料が紛失していることが発覚して、新聞に載ったことがある。私のように父が吉備考古会の会員であった家には、倉庫とか本箱の中に吉備考古の会報が眠っているかもしれない。

昭和 13 年（1938）2 月吉備考古 36 号に、会員 95 名のその当時の会員の住所と名前が記されています。今から 82 年前のことです。私の文章を読んで頂いて、心当たりの方や知っている方がおられたら、岡山歴史研究会事務局か私に連絡して頂ければ幸いです。

2 億年の神秘 笠岡市立カブトガニ博物館

館長 森信 敏

岡山県の最も南西部に位置する笠岡市には、日本で 2 ヶ所しか指定されていない、国の天然記念物「カブトガニ繁殖地」があります。その繁殖地である、風光明媚な神島水道を望む場所にカブトガニ博物館があります。

笠岡市のカブトガニ繁殖地が国の天然記念物に指定されたのは昭和 3（1928）年で、生江浜（おえはま）海岸という、現在の指定地から約 5km 北西に位置する場所でしたが、昭和 41（1966）年から始まった笠岡湾大干拓によってほとんど干陸化してしまいました。生江浜の繁殖地の干陸化に伴い、昭和 46（1971）年に神島水道が天然記念物「カブトガニ繁殖地」として追加指定されました。

また、繁殖地という場所を守るだけでなく、カブトガニそのものを守るために昭和 50（1975）年に博物館の前身である「カブトガニ保護センター」が設立されました。カブトガニ保護センターへの見学者が年間 30,000 人を超えるまでになり、カブトガニの進化の歴史を学習する全国の見学者に対し、生涯学習の機会と場所を提供し、併せて「まちづくり」の一環、笠岡市の教育、文化の拠点となることを目的として、平成 2（1990）年に「カブトガニ博物館」が開館しました。

ちなみに博物館敷地内にある、カブトガニを産卵させる池は、博物館や保護センターができるよりもさらに古く、岡山県の水産試験場があった昭和の初期から利用されており、旧農林省の水産学者だった父親が赴任していた関係で、故大島渚監督も 6 歳まで笠岡に滞在していたそうです。

カブトガニ博物館では、生きているカブトガニを間近で見られるだけでなく、カブトガニがこれまでたどってきた進化や生態を化石や標本などを用いて展示しています。さらに、カブトガニは約 2 億年前から姿かたちを変えずに生きてきたことから、「生きている化石」と呼ばれており、2 億年前の地球環境を学んでいただくために、館内 2 階部分には、様々な恐竜の骨格なども手が届くほどの間近に展示しています。また、隣接する恐竜公園では、学術監修を受けた精巧な恐竜の復元模型が 7 種 8 体設置されているだけでなく、植栽されている植物は全て化石植物であるという、こだわりを持った公園になっています。

カブトガニのことを学ぶもよし、公園で恐竜を見ながら遊ぶもよし、ぜひご来館いただければ幸いです。



カブトガニ博物館の全景



笠岡市立カブトガニ博物館

〒714-0043 岡山県笠岡市横島1946-2

TEL : 0865-67-2477 FAX : 0865-67-2424

◇HP :

<http://www.city.kasaoka.okayama.jp/site/kabutogani>

その他 Facebook あり

◇開館時間 :

9:00 ~ 17:00 (入館は 16:30 まで)

◇休館日 :

毎週月曜日・12月29日～1月3日・祝日の翌日。

ただし、3月25日～4月10日・4月27日～5月10日・7月15日～8月31日は無休

探訪会のお知らせ

塩飽諸島、本島ウォーキングのご案内

来年、2021 年（令和 3 年）春に、瀬戸内海、村上水軍が活躍した塩飽諸島、本島（丸亀市本島）で開催いたします。多くの皆様の参加申し込みをお待ち申し上げております。

1. 日 時 令和 3 年 3 月 12 日（金）

雨天の場合は 1 週延期

2. 参加費 2,000 円 弁当と飲物は各自持参

3. 参加募集数 約 30 名（先着順）

4. 主な探訪予定地 およそ 5km のウォーキング

- ・ 咸臨丸渡米 150 周年記念碑：
咸臨丸 96 名の乗組員中 35 名は本島の水夫。
- ・ 芝居小屋千歳座（丸亀市文化財）：
塩飽大工建築の回り舞台。
- ・ 笠島のまち並み（伝統的建造物群保存地区）：
塩飽船大工の江戸期から明治期の建物、敷石等が残る落ち着いた雰囲気のある街並み。
- ・ 専修寺：
法然が讃岐に流されたとき専修念仏道場の庵が建てられた場所。
- ・ 石切り場跡（丸亀市指定文化財）：
島の殆どは御影石で、大坂城、江戸城にも使用。
- ・ 東光寺薬師如来（国指定重要文化財）：
1150 年頃造の限りなく国宝に近い仏像。
- ・ 塩飽勤番所（国指定史跡）：
人名（にんみょう）自治領の実務政所。城と同

等の機能を有し、信長、秀吉、秀次、家康、秀忠の朱印状あり。

5. 案 内 三宅邦夫氏（本島ガイド）

6. アクセス

児島観光港集合 9 時集合

[むくじ丸海運有限会社の連絡船で本島往復
自家用車の駐車は無料]

行き 児島観光港 9:30 発→本島港 10:00 着
JR 岡山駅発 8:40 列車あり

帰り 本島港 16:45 発→児島観光港 17:15 着
JR 児島駅発 17:40 列車あり

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

申込先

参加ご希望の方は名前、住所、電話番号、集合地児島観光港迄の交通手段を明記し 電話、Eメール、はがき、FAX 等でお申込み下さい。同伴者のある場合は連名で同様に。

申込み先及び連絡先：

- ・ 電 話：工藤 博 090-4654-8964
- ・ Eメール：工藤 博 sw225442@tw.drive-net.jp
- ・ はがき：工藤 博 〒710-0803 倉敷市中島2007-8
- ・ F A X：工藤 博 086-466-0192

児島観光港迄の交通手段

（いずれかに○印 自家用車 JR ）

訃報

長年、運営委員として、初代サロン委員長、そして会計監査役として活躍してこられた樋口俊介氏が亡く

なられました。ここに謹んでご冥福をお祈りします。

編集後記

未だに新型コロナウイルスの感染が収まらないまま秋を迎えた。東京はいざ知らず、岡山では感染者数が少ないので、それほど緊張感はないが、それでも感染者数が発表されると油断してはと思う。Go Toキャンペーンで全国に広がるのではと懸念されるが、経済も、と考えると難しい。「新型のウイルス皆を哲学者」という川柳が的を射ている気がする。

その中であって、歴研サロン会は継続して開かれている。縄文時代を基本とする猪俣来氏の講演、人間生活の原点を感じさせられた。いろいろのものが溢れる現代、ものに、あるいは経済に踊らされているのではないかと反省させられる。主人公は誰か。何かと。

能勢さんの「吉備真備と片仮名」、囲碁を持ち帰っ

たのは知っていたが、片仮名まで作ったとは知らなかった。あの時代、東シナ海を渡って異国の地で学び、生活するのはどれだけ勇気のいったことか。（楠）

発 行 岡山歴史研究会

会 長 石井 保

編集長 楠 敏明

事務局 〒701-0204 岡山市南区大福415-14

山田 良三方

電 話 090-1033-3327（携帯電話）

F A X 086-806-2525

メール okayama.rekiken@gmail.com

ホームページ <http://b.okareki.net/>